安楽集に引用された所謂疑偽経典について

――特に惟無三昧経・浄度菩薩経を中心として――

大内文雄

一

中国浄土教の高僧道綽は「安楽集」上下両巻の書を残している。また彼の名は諸伝記類の記載と共にその教学的内容によって不朽のものとなっている。一方、そこに引用された多数の経典の中には数種の疑為経典が存在しており、例えば「十方随願往生経」「十往生阿弥陀仏国経」「惟無三昧経」「浄度菩薩経」「善王皇帝功徳尊経」「須弥四域経」などの経典が挙げられる。これらはいづれも経典目録の記載の上からとまたその内容表現などから疑偽、即ち中国において製作された経典と見做され得るものである。「安楽集」の中にこれら所謂疑偽経典が引用されていることは既に指摘されてもいるが、[1] その中から表題の二経典を選んで、彼のこの種の経典引用の意味するところを多少とも探ってみたいと思うのが本論の目的である。

二

「惟無三昧経」は「安楽集」の第四大門第三に引用されているものである。この経典は古い時代に製作された疑偽経典のようで、既に道安（前秦建元二十一年―三八五―示寂）の目録にその名が見えている。即ち、「出三蔵記集」巻五新集安公疑経録に、

惟務三昧経一巻、或作惟無三昧、[2]

と記録されているものである。この後、「法経録」に疑惑、

「歴代三宝紀」に失訳とされて以後は、「仁寿録」「大唐内典録」に疑偽経と記録され、「武周録」「開元釈教録」においてはっきりと偽妄の経典として認識されるに至っている。時代が下るに従って次第に偽経とされて行く様子が窺えるが、ともかくも道安の頃より一貫して疑偽経とされていた経典である。

この経典は現存せず、「安楽集」の他には僅かに「諸経要集」巻十九送終部、「法苑珠林」巻六十二祭祠篇に「安楽集」所引のものとは別の引用文が見出されるのみである。その内容には善悪の報応を強調する意味合いがあり、「安楽集」の引用箇所が、念仏三昧の種々の利益を明らかにする上にも、特にその功利の大なるものとして行者の延年益寿を説かんとするものであることと相応している。その引用文とは次のようなものである。

有兄弟二人、兄信因果、弟無信心而能善解相法、因其鏡中自見面上、死相已現、不過七日、時有智者教往問仏、仏時報言、七日不虚、若能一心念仏修戒、或得度難、尋即依教繫念、時至六日即有二鬼来、耳聞其念仏之声、竟無能前進、還告閻羅王、閻羅王索符、已注云、由持戒念仏功徳生第三炎天③

この一文は他書には同文を見出すことができず、従って同経典文での比較ができない。そこで、この「惟無三昧経」に引き続いて引用されているものに「譬喩経」という経典があるが、この両者はその文意において非常に類似する所を持っている。ここでは、この両経典間の文意語句の相似について述べることにより、道綽のこの種の経典引用の意味するところを窺ってみたいと思う。

「安楽集」での「譬喩経」引用文とは次のようなものである。

有一長者、不信罪福、年已五十、忽夜夢、見刹鬼索符来欲取之、不過十日、其人眼覚惶怖非常、至明求覓相師占夢、師作卦兆云、有刹鬼、必欲相害、不過十日、其人惶怖倍常詣仏求請、仏時報云、若欲攘之、従今已去、専意念仏持戒、焼香然燈懸繒幡蓋、信向三宝、可免此死、即依此法専心信向、刹鬼到門見修功徳、遂不能害、鬼即走去、其人縁斯功徳、寿満百年死得生天、復有一長者、名曰執持、退戒還仏現被悪鬼打之④

ところでこの一文は、「経律異相」巻三十七優婆塞部に引いてある「雑譬喩経」の文とその内容構成を全く一致させている。次にその「経律異相」所引文を掲示してみたい。

昔人不信罪福、年已五十、夢見殺鬼欲来取之、眼覚惶怖、求師占夢、師作卦兆云、有殺鬼、必欲相害、不過

十日、若欲攘之、従今已去十日中間、受佛五戒、燒香燃燈懸繒幡蓋、信向三宝、可免此死、即依此法専心信向、殺鬼到門見作功徳、不能得害、鬼即走去、其人縁斯、寿満百歳死得生天[5]

これによって道綽が引用している「譬喩経」というものが、実は「雑譬喩経」であることがわかる。そしてこの両者を比較してみる時に、道綽による注目すべき改変が施されていることに気づくのである。以下、このことに関して述べてみたいと思うが、その前に「安楽集」所引の「惟無三昧経」と「譬喩経」との文の類似について若干述べておきたい。

この両引用文については、第一に内容の同似、第二に語句の同似が挙げられる。まづ第一については、その主人公が共に善悪の因果を信じない弟と長者（「経律異相」所引文では単に人）であること、そして彼等が死の恐怖に怯えてより、仏の教えに従って専心に持戒念仏を修めることとなり、その功徳によって共に死して天に生ずるを得たという内容であることが指摘される。第二については、「惟無三昧経」の「一心念仏修戒」「依教繫念」、また「雑譬喩経」の「依此法専心信向」などの語句が注意される。「安楽集」一部の中には「専」またはそれに関る語が頻出しており、[6]道綽の注意の方向が窺えるのであるが、この両引用文の語句の類似性も、また彼がそうした「専」に対する強い意識を表明した結果であろうと思われる。

ところで、「雑譬喩経」からの「経律異相」「安楽集」両引用文の比較であるが、まず、「経律異相」引用文では、

夢見殺鬼欲来取之、

とあるところを、道綽は、

忽夜夢、見刹鬼索符来欲取之、不過十日、

と、「索符」「不過十日」の語句を付加して言い換えている。「安楽集」において先出の「惟無三昧経」には、「死相已現、不過七日」「閻羅王索符、已注云」などの句があり、これらと同様の句が付加された結果、「雑譬喩経」は「惟無三昧経」と同様の文意となっている。「経律異相」所引の「雑譬喩経」に「索符」などの句がなく、疑偽経典である「惟無三昧経」にそれがあることは、疑偽経典の性格の一特徴である民間信仰との混淆によるものであろう。従って道綽がその特徴に注目していることは、彼が所謂名籍之記[7]という人々の寿命に直接関る具体的観念を有していたことを示唆するものである。この両経典は、行者の延年益寿を言うその証明として引用されているものであるが、これは善導においても同様で、即ち、「観念法門」には、

即蒙弥陀加念、得除罪障、又蒙仏与聖衆常来護念、即蒙護念、即得延年転寿長命安楽、因縁一一具如譬喩経・惟無三昧経・浄度三昧経等説、此亦是現生護念増上縁⑧、

と述べられてある。ただこの一文を見て注意されることは、特に、「雑譬喩経」とあるべきところを「譬喩経」として取り上げていることで、恐らくは、「安楽集」中の道綽の付加改変を経た「雑譬喩経」を見た上でのことであろうと推察される。

次に、「経律異相」引用文では、或る人に対して師が告げた言葉として、

若欲攘之、従今已去十日中間、受仏五戒、焼香燃燈懸繒幡蓋、信向三宝、可免此死、

と記しているが、道綽は、これを仏の言葉として次のように改変している。

其人惶怖倍常詣仏求請、仏時報云、若欲攘之、従今已去、専意念仏持戒、焼香然燈懸繒幡蓋、信向三宝、可免此死、

師を仏に置き換えたことによって、「受仏五戒」が「専意念仏持戒」とされねばならなかったのであろうが、これによって、「受仏五戒」が「惟無三昧経」に言う仏の言葉としての「一心念仏修戒」と同様の言葉となり、またその付加改変によって「雑譬喩経」は「惟無三昧経」と同様の文意となっている。こうした明白な付加による改変を行っていることは、とりもなおさず、彼の中に、仏の直説としての「専意念仏持戒」を強調せねばならなかった自覚が働いていたためと考えられようし、従って、先に挙げた語句の類似性も彼のこうした自覚のもたらした所産と考えられよう。

道綽は、以上述べて来たように、「惟無三昧経」という疑偽経典を引用することにより、疑偽経典の一特徴、即ち民間信仰に密接している性格に着目して、念仏三昧を行ずる者には現実的利益として延年益寿のあることを示したのである。また、その特徴に則って、歴代の経典目録には疑偽経典とは記録されていない「雑譬喩経」⑧さえも要所要所を適宜に改変して行くことによって、「惟無三昧経」共々、念仏三昧を行うことが仏の直説として説かれてあることを示し、この両者によって、合わせて念仏三昧の利益の多大であることを強調したのである。

三

「浄度菩薩経」は「安楽集」の第九大門第二に引用され

ているもので、二つの引用文がある。第一の引用文は次のようなものである。

人寿百歳夜消其半、即是滅却五十年也、就五十年内、十五已来未知善悪、八十已去昏耄虚劣、故受老苦、自此之外、唯有十五年在、於中、外則王官逼迫長征遠防、或繫在牢獄、内則門戸吉凶衆事牽纏、煢煢忪忪常求不足、[10]

この一文には、「安楽集」に引用されている多数の経典の中でも、特にその説述体裁に興味を惹かれるものがある。しかしこの引用文は、「浄度菩薩経に拠る」という明白な前言があるにも拘わらず、「浄度菩薩経」という経典名は歴代の経典目録上には現われておらず、また名称が似ている疑偽経典「浄度三昧経」の現存のものや諸書における引用文にもこの一文に該当するものは全く見ることができない。それは、実は「五王経」という一巻の小部の経典の中に見ることができるものであり、[11]またそれは、引用文と一致するばかりでなく、この引用箇所を説き起すに際して述べている道綽の言葉にも相応している。

現在この経典は大正大蔵経巻十四に収載されているが、その本文の前に「失訳人名、今附東晋録」と注記してあるように失訳経典である。その経典目録上での記録は「法経録」のものを最初とするが、そこには小乗の失訳一巻経と記録されている。この後、経典目録には全て「法経録」と同様の記載が続くが、「開元釈教録」に至って、その巻三総括群経録に「五王経」など三十八部四十五巻を列記した後、

似是遠代之経、故編於晋末、庶無遺漏焉

と注記し、また続いて、

並為東晋失源云、[12]

と言っている。従ってこれによって、先の大正大蔵経所収本中の注記は、「開元釈教録」の編者智昇の見解を承けたものであることがわかる。

ところで、この「五王経」は既に「経律異相」中に引用されている。即ちその巻二十七に全文が掲載されているが、これは大正大蔵経所収本と比較すると簡略である。[13]ともかくもこのことによって、「五王経」は、「出三蔵記集」にその名が収録されていないにも拘らず、恐らくその成立の頃までには翻訳されていたものと考えられねばならないであろう。

この経典の説述の目的は苦の様相を示す所にあると思われ、八苦、即ち生苦・老苦・病苦・死苦・恩愛別苦・所求不得苦・怨憎会苦・憂悲悩苦をそれぞれ順次に具体的に説

いている。「安楽集」の引用文に一致する部分は、その第八、憂悲悩苦を説く部分である。道綽は、第九大門第二を説き起すに際して、

第二明寿命長短者、此方寿命大期不過百年、百年之内少出多減、或生年夭喪、乃至童子身亡、或復胞胎傷堕、

と述べているが、これが「五王経」全体の文意を取り、また特に、

人生在世、長命者乃至百歳、短命者胞胎傷堕

というものと相応していることは明らかである。従って、彼がこのように「五王経」から引用し、またそこから自己の言葉を見出していることを知り得るのである。

次に第二の引用文であるが、それは「又彼の経に云く」として先の引用文に引き続いて述べられてある。これまた道綽は「浄度菩薩経」として認識していたと考えられよう。そこでこの「浄土菩薩経」という名で引用されている一文について考えてみたい。第二の引用文とは次のようなものである。

人生世間、凡経一日一夜有八億四千万念、一念起悪受一悪身、十念念悪得十生悪身、百念念悪受一百悪身、計一衆生一形之中、百年念悪悪即偏満三千国土受其悪身、悪法既爾、善法亦然、一念起善受一善身、百念念善受一百善身、計一衆生一形之中、百年念善三千国土善身亦満[14]

これと語句文意などが相応すると思われるものに、「法苑珠林」巻二十三慚愧篇所引の「浄度三昧経」からの一文がある。それは次のようなものである。

又浄度三昧経云、罪福相累重数分明、後当受罪福之報、一一不失、一念受一身、善念受天上人中身、悪念受三悪道身、百念受百身、千念受千身、一日一夜種生死根、後当受八億五千万雑類之身、百年之中種後世栽甚為難数、魂神逐種受形遍三千大千刹土、体骨毛皮遍大千刹土、地間無空処[15]

ここで、先に「惟無三昧経」の項で述べた「諸経要集」「法苑珠林」所引の「惟無三昧経」からの一文を掲示しておきたい。これまた第二の引用文と類似した語句を有しているからである。

仏告阿難、善男子、人求道安禅、先当断念、人生世間所以不得道者、但坐思想穢念多故、一念来一念去、一日一宿有八億四千万念、念念不息、一善念者、亦得善果報、一悪念者、亦得悪果報、如響応声、如影随形、是故善悪罪福各別[16]、

「浄度菩薩経」という経典については、それが「浄度三昧経」のことであるとは既に望月信亨氏また牧田諦亮氏の著書論文に指摘されている。[17] 特に牧田氏の論文には敦煌本「浄土三昧経」を用いて、その中に現われる対告者としての「浄度大士」に注意されている。恐らく道綽は、「浄度大士」即ち「浄度菩薩」としてこの経典を「浄度菩薩経」の名で見知っていたものであろうし、また先に挙げた「法苑珠林」所引の「浄度三昧経」と語句内容に一致する所が多いこともあり、これは「浄度三昧経」のことと考えてよいであろう。[18]

この「浄度三昧経」に関しては経典目録上にも記載が多いが、まづ「出三蔵記集」巻四新集続撰失訳雑経録に、

浄度三昧経二巻、或云浄度経、[19]

とあるものと、同巻五新集抄経録に文宣王蕭子良の抄経として「抄浄度三昧経」四巻[20]を記し、また別に「浄度三昧抄」一巻[21]を記しており、以上三種をその記載の最初としている。即ち、初めには失訳経及び抄経としてその名が見えている訳であるが、「法経録」になると失訳経の名は見えないかわりに、宋の宝雲訳という「浄度三昧経」三巻[22]が記録され、また別に竟陵文宣王の抄経として四巻本が記録されてこれは偽妄とされている。抄経を偽妄の経典とする姿勢を初めて打ち出しているのがこの「法経録」で、注目されるところである。次いで「歴代三宝紀」には北魏の曇曜・宋の智厳・宝雲・求那跋陀羅の翻訳したというそれぞれ一巻・一巻・二巻・三巻の「浄土三昧経」が現われている。しかしこの訳人名のあるものは、早くも「仁寿録」には宝雲訳とした一巻本が欠本と記録され、また「武周録」にも宝雲訳とは書かれていないが、しかし一巻の欠経が記されてある。こうして「開元釈教録」になると、この四訳全てが同本異訳として現存しないことを明記されるに至る。この「開元釈教録」に至る間、「大唐内典録」「武周録」にもそれぞれ「歴代三宝紀」の記載を承けてこの四訳が記録されているのであるが、特に後者においてこの四訳は同本別訳とされている。しかし疑偽経典としての「浄度三昧経」で問題となるのは、「武周録」巻十三大乗修多羅蔵中に編入されている「浄度三昧経」一部三巻[23]である。そして「開元釈教録」ではこれを偽妄の経典と見做している。即ちその巻十八疑惑再祥録にこれを文宣王蕭子良の抄撰したものとして、

簫子良抄撰中有浄度三昧経三巻、疑此経是[24]

と述べているが、この記事が、先に翻訳者名のある四種の「浄度三昧経」を列記した後の注記、

大周入蔵録中有浄度三昧経三巻、尋其文詞疎浅義理差異、事渉人謀難為聖典、故編疑録別訪真経、[55]

というものと対応していることは明らかである。また同録巻二十入蔵録にも、「浄度三昧経」三巻などを列記した後、次のように言っている。

浄度経下十部一十五巻、並是古旧録中偽疑之経、周録雖編入正文理並渉人謀、故此録中除之不載、[56]

ところで、この三巻本を文宣王の抄撰としていることは疑問の余地のあるところで、同録巻十八偽妄乱真録には彼の抄経を列記しているが、「出三蔵記集」「法経録」に同様、四巻本を記載しているのみで、三巻本は見ることができない。但し、「仁寿録」巻四には文宣王の抄経中に「浄度三昧経」三巻を記している。しかしこれについては、智昇自らそれが四巻本のことであるとその抄経の下に注記している。[57]従って、三巻が四巻の誤りであるとは考えられない。智昇がこの経典を偽妄乱真録に編入することをせず疑惑再詳録に編入したのは、前朝の敕によって編纂された「武周録」がこの経典を仏典と認め大乗入蔵録中に記録している事実があるからで、このことは既に指摘してあるところである。[58]従って、先に掲示した注記にも明らかなように、彼はこの経典に対しては明白に偽妄としての判断を下しているにも拘らず、ことさらに文宣王の抄撰と注記して疑惑再詳録に記録し後世の判断に待つ態度を示していることは、或いは前朝の敕撰になる「武周録」を意識した、それが偽妄の経典であることを言うための方策であったとも考えられるものである。ともかくも、「武周録」成立前より疑偽経典である三巻本「浄度三昧経」が既に世間に流布しており、また一方では隋の頃から「開元釈教録」成立に至る間において、訳人名のある「浄度三昧経」が次第に姿を隠して行ったことを知り得るのである。

「安楽集」に引用されている「浄度菩薩経」が、「法苑珠林」所引の「浄度三昧経」と一致している点が多いことは先に述べたが、「浄度三昧経」には他書においても引用例が多く、また経典としての体裁で現存するものもあり、それらが歴代の経典目録に記録されている「浄度三昧経」のどれに相当するものなのか簡単には割出しかねる要素が多い。この経典の引用例としては、例えば「経律異相」に五例、「諸経要集」に四例、「法苑珠林」に五例あり、また信行の「三階仏法」、法琳の「弁正論」、善導の「観念法門」などにも引用されている。経典としての体裁のままで現存するものには、その巻第一として大日本続蔵経第一輯第八十七套第四冊所収のものがあり、またスタイン蒐集の

敦煌本にも三種あり、現にその写真も京都大学人文科学研究所に収められている。この経典は、「経律異相」「諸経要集」「法苑珠林」を見ると、地獄部・送終部などに多く引用されており、従ってこれらの編纂者には、この経典が善悪の業報を説く中にも特に地獄のことに言及しているものとして理解されていたようである。ともかくも、現在見ることのできる「浄度三昧経」の多くは、疑偽経典としての性格を濃厚に有していると考えられており、またその説述内容に関しても種々論究されている。[29]

第二引用文は「浄度三昧経」と相応する内容を持っているのであるが、しかし一方、「惟無三昧経」の文意ともよく相応しており、また語句にも一致するものがある。従って、或いは道綽が、「浄度三昧経」「惟無三昧経」の両者から文句を取りまた文意を取って引用したものとも考えられる。以下、このことに関して若干述べてみたい。

「安楽集」第九大門第二に引用されている経典は「涅槃経」「浄度菩薩経」、そして「無量寿経」「善王皇帝尊経」の順の以上四経であるが、結局ここでは、後者の二経典の証明によって、念仏往生者の寿命長遠なることは仏と同等である、而してその念仏者の往生は八菩薩の臨終時における飛来迎取によって確実であり、従って人々は須く念仏すべきであるということを言おうとしている。そして「浄度菩薩経」の二文はそのための謂わば布石として引用されているもので、まづ初めに「五王経」による第一の引用文によって、この世の人間の寿命がいかにはかないものであるかを具体的な数字と実例とによって示した訳である。次に第二の引用文によっては、念には善念と悪念とがあり、またそれぞれに善と悪との報があることを示している。そしてその後、彼は、

若得十年五年念阿弥陀仏或至多年、後生無量寿国、即受浄土法身恒沙無尽不可思議也、今既穢土短促命報不遠、若生阿弥陀浄国、寿命長遠不可思議、

と述べているが、この言葉にも明らかなように、第二の引用文は善念と悪念の果報の存在を言うそのことに引用意図があり、そこから念仏という善念を行うことを人々に勧めようとしているのである。従って、先の「惟無三昧経」の後半に言う、

一善念者、亦得善果報、一悪念者、亦得悪果報、如響応声、如影随形、是故善悪罪福各別、

という一文などは、はっきりと道綽の引用意図に叶うものと言い得よう。

また語句の一致については、例えば「惟無三昧経」に

は、

人生世間、……一日一宿有八億四千万念、

などがあり、また「浄度三昧経」には、

一念受一身、……百念受百身、千念受千身、百年之中種後世栽甚為難数、魂神逐種形遍三千大千刹土、

などの語句がある。以上、文意と語句との両面より述べて来たが、「惟無三昧経」は事実第四大門第三に引用されており、そこでもまた念仏者の寿命の長遠であることが説かれていた。この第二の引用文が「浄度三昧経」と「惟無三昧経」との両者より取意撰択して説き示されたものと考えることは不可能ではないであろう。

四

道宣の「続高僧伝」巻二十と迦才の「浄土論」巻下とにある道綽伝の中には、浄土教を弘める上に、彼がどのような方法を用いどのような態度で以て臨んだかを推察せしめる記載が見られる。中でもとりわけ興味を惹くものが、小豆・麻豆を用いた彼の所謂数量念仏の奨励であるが、その他にも布教時の姿を偲ばせるものがある。例えば、「続高僧伝」の、

詞既明詣説其適縁、比事引喩聴無遺抱、人各掐珠口同仏号、毎時散席響弥林谷、[36]

というものなどが挙げられよう。こうした身近な事柄に託し、また適切な譬喩を用いて浄土教の宣布に努めたことは、今までに述べた「惟無三昧経」や「雑譬喩経」、また「五王経」などの引用に限らず、「安楽集」の中にはそのことを窺わせるに足る記載を随所に見ることができる。例えば次のような例がある。

有名即法者、如諸仏菩薩名号、禁呪音辞、修多羅章句等是、如禁呪辞曰、……又如有人被狗所嚙、灸虎骨敷之、患者即愈、或時無骨、好擲掌摩之、口中喚言虎来虎来、患者亦愈、或復有人患脚転筋、灸木瓜枝敷之、患者即愈、或無木瓜、灸手磨之、口喚木瓜木瓜、患者亦愈、吾身得其效也、[37]

これは「安楽集」の第二大門第三に見えるものであるが、曇鸞の「浄土論註」巻下に殆ど同様の一文を見ることができる。[38] 恐らく道綽はそれを承けたものであろう。しかもなお彼は「浄土論註」には見えない別のものを付け加えている。先の虎骨云々の禁呪のことがそうである。これらの事柄は曇鸞もその同所に、「如斯近事世間共知」と記しているように、民間においては早くから存在していた信仰であろう。道綽はこれら平易な例を引いて仏教教理の説明

にあてていた訳で、彼の布教時の姿を推察せしめる好例である。また「安楽集」第十一大門第二には次のような記述がある。

第二次弁衆生死後受生勝劣者、此界衆生、寿尽命終、莫不皆乗善悪二業、恒為司命獄率妄愛煩悩、相与受生、乃従無数劫来、未能免離、若能生信帰向浄土、策意専精、命欲終時、阿弥陀仏与観音聖衆、光台迎接行者、歓喜随従合掌乗台、須臾即到無不快楽、乃至成仏、又復一切衆生、造業不同、有其三種、謂上中下、莫不皆詣閻羅取判、若能信仏因縁願生浄土、所修行業竝皆廻向、命欲終時、仏自来迎、不干死王也。

右の文中に、司命・獄率・閻羅・死王などの名称が出て来ているが、これらは「浄度三昧経」などには頻々として現われているものであり、「閻羅取判」という言葉などは、「惟無三昧経」の「閻羅王索符、已注云」という記述と思い合わされる。また仏・菩薩の臨終来迎のことも述べられてあるが、これについては「浄度菩薩経」の項で述べた「善王皇帝功徳尊経」に言う八菩薩の臨終時における飛来迎取の説などと関連する。こういった事例は疑偽経典に特に顕著なもので、即ちそれらの一大特徴と指摘されるものである。そして道綽の右の一文には、それら疑偽経典の性格に共通する一面が見出せると言わねばならない。

また「惟無三昧経」の項で述べた「雑譬喩経」からの引用文に道綽による経文改変の跡が見て取れることは、彼の疑偽経典引用の意図が、単に自説を証明するためだけでなく、更にそれを強調するところにあったことを示唆するものである。言い換えれば、所謂疑偽経典と言われるものに多く盛り込まれている善と悪との対比、その行為に対する必然的な報いを強調せねばならなかった自覚が、彼の中にはあったことを示唆している。そしてそのことは、「浄度菩薩経」の項で述べたように、第二引用文が「浄度三昧経」と「惟無三昧経」との両疑偽経典から取意引用されたものと考えられることによって、より明らかにされよう。

この二経典引用の目的は人々をして念仏願生せしめんとするところにあり、それはまた「安楽集」全体の経典引用の目的でもある。しかし、この二経典が特に平易な説述体裁を持った疑偽経典であり、それを以て、彼が現世利益的な念仏三昧の利益としての延年益寿を言い、また臨終往生の必得を言う布石としていることは、彼の浄土教宣布の対象がそのような疑偽経典の内容を自然に受容し得る一般庶民であったことを意味しているものである。そしてこのことは、先に例として挙げた「安楽集」の二文からも窺える

ように、彼もまたそうした人々と同様に、疑偽経典出現の背景である民間に言い伝えられている信仰や、それらと混淆した仏教的観念を自然に受容し得る一面を持っていたことを意味するものと言い得よう。

註

① 望月信亨著「仏教経典成立史論」後篇、また「古佚経の遺文」（『仏教史の諸研究』所収）、牧田諦亮著「中国仏教における疑経研究序説」（東方学報京都第三十五冊所収）など。

② 大正五五、三八頁c、

③ 大正四七、一六頁a、

④ 大正四七、一六頁a、

⑤ 大正五三、二〇一頁b、

⑥ 例えば、第二大門第二には「欲令衆生専志有在」、同大門第三には「但能専至相続不断」、第四大門第二には「常能至心専念仏」「一向専念阿弥陀仏」「一向専志行念仏三昧」、などの文句が見えているが、他にも甚だ多く、枚挙に遑がない。

⑦ 「灌頂経」第十二「抜除過罪生死得度経」に、

閻羅王者主領世間名籍之記、……又有衆生不持五戒不信正法、設有受者多所毀犯、於是地下鬼神及伺候者奏上五官、五官料簡除死定生、或注録精神未判是非、若已定者、奏上閻羅、閻羅監察随罪軽重、考而治之、（大正二一、五三五頁c）

などとある。この経典はまた「薬師琉璃光経」とも言い、「出三蔵記集」巻五新集疑経偽撰雑録に「此経後続名法、所以偏行於世」とあり、所謂撰人名のある偽経である。「灌頂経」第十一は「十方随願往生経」であるが、これは「安楽集」所引の疑偽経中、最も引用回数の多いもので、「法経録」「仁寿録」などにはこの二経共々疑偽経典として記録されてある。

⑧ 大正四七、二五頁c、

⑨ 「出三蔵記集」巻二に鳩摩羅什訳一巻、また巻四に失訳の一巻・一巻・二巻・二巻・六巻・八十巻の五種が記録されている。大正大蔵経にはその巻四に鳩摩羅什訳、支婁迦讖訳、康僧会訳、及び失訳の計四種が収載されている。しかし、この「安楽集」引用文はそれらの中には見出すことができない。この経典に関しては特に常盤大定著「後漢より宋斉に至る訳経総録」林屋友次郎著「異訳経類の研究」参照。

⑩ 大正四七、二〇頁a、

⑪ 何謂憂悲悩苦、人生在世、長命者乃至百歳、短命者胞胎傷墮、長命之者与其百歳、夜消其半、余有五十年、在醉酒疾病、不知作人、以減五歳、小時愚癡、十五年中未知礼儀、年過八十、老鈍無智耳聾目冥、無有法則、復減二十年、已九十年、過余有十歳之中多諸憂愁、天火欲乱時亦愁、天下旱時亦愁、天火大水亦愁、天火大霜亦愁、天火不熟亦愁、室家内外多諸病痛亦愁、持家財物治生恐失亦愁、官家百調未輸亦愁、家人遭県官事閉繫牢獄、未知出期亦愁、兄弟妻子遠行未帰亦愁、居家窮寒無有衣食亦愁、比舎村落有事亦愁、社稷不辦亦愁、室家死亡無有財物殯葬亦愁、至春時種作無有犁牛亦愁、如是種種憂悲常無楽時、至其節日、共相集聚、応当歓楽、方共悲涕相向、此是苦不、答曰、実是大苦、（大正十四、七九六頁c～七九七頁a）

⑫ 大正五五、五一〇頁b、

⑬ 大正五三、一四七頁c～一四八頁c、

⑭ 大正四七、二〇頁a～b、
⑮ 大正五三、四五五頁a、
⑯ 大正五四、一八二頁a、（「諸経要集」）
大正五三、七五四頁b、（「法苑珠林」）
⑰ 望月氏著「仏教経典成立史論」後篇、牧田氏著「浄度三昧経とその敦煌本」（仏教大学研究紀要三七号所収）、また前掲注①同氏論文、
⑱ 前掲注⑧にも明らかなように、善導ははっきりと「浄度三昧経」の名を使用している。即ちこれまた道綽の「浄度三昧経」引用の傍証となると思われる。
⑲ 大正五五、二一頁c、
⑳ 大正五五、三七頁c、
㉑ 大正五五、三八頁a、
㉒ 但し「法経録」巻一にはその下に「晉世沙門宝雲於揚州訳」と注記してある。しかし今は「歴代三宝紀」以後の諸経録の見解に従っておきたい。
㉓ 大正五五、四六五頁a、
㉔ 大正五五、六七一頁c、
㉕ 大正五五、六三二頁c、
㉖ 大正五五、六九九頁c、
㉗ 大正五五、六七九頁bに、
抄浄度三昧経四巻、仁寿録云三巻、
とある。
㉘ 前掲注①牧田氏論文（東方学報京都第三十五冊三五三頁上段）
㉙ 牧田氏論文「浄度三昧経とその敦煌本」にも付載されてある敦煌本「浄度三昧経」は、同氏もその文辞が他本に比して頗る出色であることを指摘しておられる。また望月信亨氏も敦煌本以外の「浄度三昧経」を用いて種々詳しく論究しておられるが、牧田諦亮氏がその論文末尾に、「浄度三昧経」の諸佚文を総合して「浄度三昧経の研究」を発表する予定と言われているので、今はそれを待つこととしたい。
㉚ 大正五十、五九三頁c、
㉛ 大正四七、一二頁a、
㉜ 又苦転筋者、以木瓜対火熨之則愈、復有人、但呼木瓜名亦愈、吾身得其效也、如斯近事世間共知、況不可思議境界者乎、（大正四十、八三五頁c）
また道端良秀著「曇鸞と道教との関係」（「福井博士頌寿記念東洋文化論集」所収）参照。
㉝ 大正四七、二一頁a、

（本学特別研究生　東洋仏教史学）